

ベケット研究会第 53 回例会 発表要旨

2019 年 7 月 13 日 (土)

筑波大学東京キャンパス

虚構、そして可哀想な「私」——サミュエル・ベケットの小説三部作における共苦(コンパッション)

清水さやか

『モロイ』『マロウンは死ぬ』『名づけえぬもの』からなる(前期)小説三部作では、語り手が「私」として「私」自身について語ろうとすると、決まって苦しみの感覚が訪れる。その苦しみは孤独で、「私」以外に誰も引き受ける者はいない。「私」はたった独りで、いつまでもその苦しみを背負い続けなければならない。そして「私」は、しばしば自らをいかにも哀れな存在のように語ってみせるのだ。ただし語り手たちによれば、苦しむ「私」の傍らには、少なくとももう一人の「私」が存在している。もう一人の「私」は、役立たずで無力で、「私」を救うことなどできない。その「私」もまた苦しみを背負っているうえ、そもそももう一人の「私」が存在すること自体が「私」の苦しみの原因ともいえるからである。もう一人の「私」がすることは、ただ「私」の苦しみを見続け、その声を聴くこと、そして自分もそばで、同じように苦しむことだけだ。しかし、三部作の語り手たちが絶え間なく暴露するのは、「私」という存在ももう一人の「私」という存在も、所詮は虚構物に過ぎないということである。そのような偽物たちが「共に [com] - 苦しむこと [passion]」に、いったいいかなる意味があるといえるのか。本発表では、ベケットの一人称語り的手法が完成を見たといえる小説三部作に注目し、上記の問いを「私」と言語をめぐる問題と捉え直したうえで、《passion》(受難/受苦/情熱)、《fiction》(虚構)、《témoignage》(証言)といったキーワードとともに考えてみたい。

貧しさと想像力

対馬美千子

サルトルの想像力は現実の変革や行為(action)の重要性を強調する政治的なアンガージュマンと関わっていたが、ベケットの想像力はこのようなアンガージュマンをめざすものではなかった。想像力の力能(the power of imagination)にもとづくサルトルのモデルとは異なり、ベケット作品は想像力の中心に想像

することの不能性(the powerlessness to imagine)があることを示す。本発表では、ブランショの文学論やドゥルーズの映画論を参照しながら、「三つの対話」、『死せる想像力よ想像せよ』の読解を通して、ベケットにおける想像することの不能性の意味について考える。ベケットは「克服不可能なみずからの貧しさを恨まない芸術」について語っているが、この想像力の中心における想像することの不能性は「克服不可能な貧しさ」と不可分である。